

今週から各教科、各科目の授業がスタートしている。廊下をうろうろしながら、授業の様子を見てみると、生徒はどの授業にも落ち着いて取り組んでいる。今までとの違いは、通常よりも生徒の座席の間隔が広いことと、窓が開いていることである。

新採用教員であるR先生の授業も始まった。ちょうど3年2組で日本史の授業が行われていた。社会好きの私は教室に入り、ずっと参観させていただいた。最初に、江戸時代の日本と諸外国の関係を確認していた。鎖国である。その後、「今日は皆さんに幕府の役人になってもらいます」ときた。そして、本時の課題を、「黒船の来航は幕府政治にどのような影響を与えただろう」と提示した。最初から本時の課題を提示しないところがよい。

授業は、先生の説明・解説と板書を中心に進められた。生徒はワークシートに書き込みながら理解していく。このスタイルでのポイントは、先生の説明・解説と生徒に渡すワークシートである。先生の説明・解説はわるくない。わかりやすい。くどくもない。「ええと」「あのう」などの余計な口癖も入らない。だから生徒が生徒全員が集中して聴いている。生徒は正直である。先生の“トーク”は授業の生命線である。今後に十分期待できる。

ワークシートはというと、まずまずである。ポイントを押さえており、生徒にとってわかりやすいものになっている。教材研究のあとが見られる。ただし、書き込むスペースがやや狭い。たぶん、先生は生徒になったつもりで実際に書いてはいないのではなかろうか。自分で書いてみれば、すぐに気が付くはずである。

50分を通して、入念な準備をして授業に臨んでいることがわかった。このことは、生徒にも伝わっているはずである。だが、一方で改善点も山ほどある。途中、指名を入れながら進めていた。そのほとんどは一問一答、単語で答えるものである。これでは、生徒の表現力はつかない。指名の仕方でも授業の途中からは「じゃあ〇〇君お願いします」「まだ指されていない人」となってしまった。実は同じ生徒に2回以上指名していたが、指名されないで終わった生徒もいるのである。

ただ、感心したのは、授業中に2回「1分間まわりの人と話し合ってみて」と指示したことである。それはじっくり考えさせたい発問だった。考えさせる前には、「〇〇の立場になって考えて」などとしていた。ということは、この授業での山場、大事なところをちゃんと意識しているということである。ただ、座席を離れているので、話し合えと言われても生徒には難しかった。

話し合った後に生徒が発表した。その考えを認め褒めたのはよかったが、さらに生徒に返して、なぜそのように考えたのか、その理由まで発表させるとなおよかった。こうすると、授業が深まり、コミュニケーション能力も向上していく。これも今後の課題である。

授業の途中で「これは終わらない」と思った。案の定、時間が来てしまい、予定されたところまでは行かなかった。黒船の来航が幕府政治にどのような影響を与えたのかについて考えるところまでは行かなかった。特別丁寧すぎたわけではない。「紙芝居を用意してきました」など生徒がわかるようにと工夫もしている。「後ろの人見えませんか」と聞いていたが、生徒は見えなくても「見えません」とは言わない。実際小さくて見えにくかった。生徒に「見えません」と言われたらどうしていたのだろうか。

「大事なところは黄色で書きます。皆さんは赤などで書いてください」「黒板を3分割して使います」など、学習のルールについても触れていた。それはいいのだが、板書の文字はお世辞にも上手とは言えない。高校の先生らしい、社会の先生らしいと言うと、おこられそうだが、雑なのである。若くても丁寧な字を書くことはできる。少なくとも丁寧に書こうとする姿勢が必要である。心がけ次第である。

説明・解説はいいのだが、「やばい」に代表される若者言葉の類いを使っているのはどうかと思う。乱れた日本語は授業に必要ない。「なので」を使っていなかったことがせめてもの救いか。最近、テレビに出てくる民放のアナウンサーの口からも「なので」が出てくる。さすがにNHKでは聞かれない。学校の授業はNHKでよい。

3年2組の生徒たちは、この日本史のR先生をどう思っただろう。きっと「いい先生」と思ったに違いない。R先生はずっと明るい表情で楽しそうに話していた。これでよい。7月頃、12月頃、そして来年の3月、R先生の授業がどのように変わっていくのか今から楽しみである。